

令和7年度 授業改善プラン

地域名	葛南教育事務所	学校名	浦安市立浦安小学校
-----	---------	-----	-----------

1. 課題（これまでの全国学力・学習状況調査結果等から）

○令和6年度全国学力・学習状況調査より

- ・児童質問調査の「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況」（10項目）における本校児童の回答状況について、肯定的回答では7項目（「当てはまる」では全項目）で全国値を下回り、児童が認識する授業改善に大きな遅れがみられた。特に、「各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動」について、肯定的回答をした児童の割合が全国値よりも大きく下回っており、本校の課題である。これは、「考えを深め」たり「次の学習につなげ」たりすることが全国の状況よりも大きく下回る主な要因と考えられる。
- ・教科に関する調査では、評価の観点別に結果を全国値と比較すると、「思考・判断・表現」については、国語・算数共に全国値と同程度、又はそれ以上である一方で、「知識・技能」については、両教科共全国値と同程度、又はそれ以下であった。「思考力、判断力、表現力等」を更に高めるためにも、児童が「知識及び技能」を生きて働くものとして習得できるよう、指導方法の工夫改善が必要である。

2. 取組のポイント（仮説、改善方法等）

○研究主題「文学的な文章を読むことからの思考力・判断力・表現力の育成

～ 話し合い活動（対話）を通して ～

I C Tの効果的活用などにより個々の考えを「視覚化」し、目的を「焦点化」した「対話」を通して、互いの考えを「共有」できるように話し合い活動を工夫すれば、児童は、自分の考えと他者の考えとの共通点や相違点をより具体的に捉えて、自分の考えを広げたり深めたりすることで、児童一人一人の思考力・判断力・表現力を高めることができるようになるだろう。

3. 具体的な実践

- I C Tを効果的に活用するため、一人1台のタブレット端末を使って自分の考えを可視化したり、友だちの考えを共有して自分の考えに生かしたりした。上学年だけではなく、下学年でも自分の音声や写真を撮って、考えの共有をするなど、各学年の実態に応じてI C Tを利用した。
- 話し合い活動（対話）では、学年ブロックに合わせた、「対話の型」を作成し、対話の場面で児童自身が相手に質問したり、答えたりするときに参考にできるよう、通年、掲示をした。対話をするうえで、相手の意見を聞いたり受け止めたりすることができることが大前提であると考え、低学年は主に「相手の意見を最後まで聞く」、中学年は「相手の意見を受け止める」、高学年は「相手の意見のよさに気づき、新たな自分の意見へと広げ深める」、ということを対話の目標に掲げ、各学年実践を行った。
- 学習の見通しをもち、毎時間、振り返りを自分の言葉で書くことで、自分の考えを可視化できるようにした。

4. 成果

- ICTを活用することで自分の考えを表出するだけでなく、相手の意見と比べたり、相手の考えのよさに気付いたりすることができた。タブレット端末だけではなく、本校の「メディアセンター」を活用して、全員の考えを大画面に映して共有することで、より多くの意見に触れ、新しい考えに気付くことができた。
- 学年ブロックで作成した「対話の型」を通年掲示したことにより、対話の場面において対話を支援するツールとなっている。児童が自分から、「質問してみよう」「相手の意見と自分の意見の似ているところはどこか」など、「意見を伝える」ことから「広げ深める対話」へと変容してきている。
- 「対話の型」を国語科に限らず、どの教科等においても意識的に活用を積み重ねていくことで、年度当初に比べて、型を用いて質問をしたり、相手の考えのよさに気付いたりすることができるようになってきている。

◆担当指導主事から

○言語活動として「対話」を位置付けることで、児童が自ら問いを立て、自分事として文学的文章の読みを深めることができた。ICTの活用では、メディアセンターの機能を生かして他者参照を行い、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を実現していた。